

# 幼児と響き合う幼稚園教員育成のための大学科目実践研究

## —「教育方法・技術論」科目を通して—

藤渕 明宏  
九州女子短期大学

Research of the Kindergarten Teachers College Subject for a Teacher to Sound with an Infant  
— In a Class "Education Method, Technique Theory"—

Akihiro FUJIBUCHI

### Abstract

This college has a subject "education method, technique theory". It was changed to the subject for kindergarten teacher trainings in the year before last. Therefore, I tried to let students (67) separate from the education method of the elementary school. And I was going to let students learn the education method of the kindergarten. And I tried to acquire the instruction method that students sound with an infant.

However, students arrived at the level of the instruction method to sound with an infant a little.

**Keywords:** *Infant, Education method, Kindergarten, Teacher training, Sounding, Derive, Play*

## 1. 研究の前提

### 1.1 はじめに

平成24年度幼稚園教諭希望対象の必須科目「教育方法・技術論」（1学年）は、これまで小学校教諭免許取得希望の学生を対象に進めていたが、平成22年度から幼稚園教諭希望者のみとなった。

著者は、過去の本科目を履修した学生は、卒業後、幼稚園・保育所等の幼児保育関係に大半は就職していたにもかかわらず、小学校教員養成のための教育方法・技術論を展開してきた。

したがって、本科目において、幼稚園教員を目指す学生は、幼稚園教育の本質からくる指導法・技術をほとんど習得することなく履修していた。

そこで、本研究では、幼稚園教育の本質にできるだけ迫る内容の展開を行い、どのように学生が内容を履修しえたかを分析し、また、その分析過程での問題点や課題を整理し、今後の幼児教育教員養成に資したく本研究に取り組んだ。

### 1.2 幼稚園教育方法の問題点

第一の問題点は、良い指導法を考えたとしても、どの幼児にも適するような一斉の指導法というのはあり得ない。一人ひとりの幼児たちの遊び・思いから出発する展開をつくっていかないといけない。したがって、一人ひとりの幼児の特性と指導法の相性のようなものがあって、幼児の相性と「響き合う指導法」というものを見つけ出さな

ければいけない。もし指導して、うまくいかないところがあったら、今までは、“この幼児は能力がない”というようにその子の責任にしがちだが、クロンバックは、「そういういい方はできない」といっている。さらに「自分はまだ幼児と響き合えるような指導法を発見していない」ともいっている<sup>1)</sup>。そのところを特に本研究では幼稚園の指導者育成の解決課題として考えてみたい。

もう一つの問題点は、小学校の指導の考え方・方法を“そのまま下ろす”ということである。学生は、これまで多くは小学校以降の一斉指導型を通して学んできたといえるであろう。たしかに小学校学習指導要領では「精神とか理解、技能、能力を養う」とうたわれている。ところが、「態度と理解の芽生え、興味を養う」というのが幼稚園<sup>2)</sup>であり、そのところを学生はなかなか理解ができず、過去の小学校以降の指導法の殻から抜け出せていないと考える。

よって、小学校と幼稚園で最も異なるのは、指導法と考える。学習内容のとらえ方も、小学校では知識、技能が中心であるといえるだろう。幼稚園のほうでは心情、意欲、態度ということになるから、指導法の違いが出てくる。方法の面で最も異なるのは「遊び」、広い意味では「生活」という考え方である。小学校で生活科があるが、幼稚園は、園生活の全部という丸ごとの生活（遊び）

の中で行われるという考え方である。生活科の資料を見ると、かなり幼稚園とつながっているようにあるが、やはり教科としての生活科である。そこでの小学校での生活科とは、幼児の一人ひとりから出発する幼稚園とは違って、小学校の生活科とは、教科書的な副読本やある教師の実践などから、構成された授業が多い。いわば真似事に近い。これは、著者にも少なからずある。本当は、対象である幼児を見つめて、そこでどうしようかということに皆が考え、工夫しなければならないが、皆が認めた何かお墨付きがほしいとか、あるいはモデルがあるとか、ブランド志向というか、著名な学者にこれはすばらしいとほめたたえられたとか、他からの評価を気にするものを取り上げようとする。幼児たちを目の前にしての自らの発想を生かすことを忘れがちになる。言い換えれば、某方式に没頭したりして、それを追究する姿勢が良いと考えてしまう傾向がある。

ある話がある。ある公立幼稚園をかつて卒園した親が、その幼稚園にたまたまインフルエンザの注射の手伝いで来ていた。その人が「先生、公立幼稚園は公立の名に“あぐら”かいていて工夫がない。これからはね、もっと・特色・を出さなければだめよ」ということを、ある先生に言った。それで、その先生は、どう答えていいかわからなくて、ただ悔しさだけが胸にきて、「先生、なんて言ったらよかったですでしょうか」と言うのである。

それでその教師は「今一人ひとりの幼児の育ちとか足どりとかいうようなものを一生懸命確かに見つめていきながら、その子の足どりに合ったような働きかけを先生がしていくのがいいので、目に見える形がないのが、むしろ特色だというふうに考えていいのじゃないのか」と言ったのである。その「目の見えない形が特色」なかなか保護者達には理解してもらうことは困難である<sup>1)</sup>。まして、保育経験の乏しい学生には至難なことであろう。

ゆえに自然の摂理みたいに幼稚園側は、なおさら特色を見つけようとしてエスカレートしていくみたいなのがある。教師も親もブラインド[看板(特色?)]がなければだめと考えてしまう<sup>2)</sup>と考える。それが当たり前のようになって、幼稚園の指導法の本質からずれていっていきと考える。

その幼稚園の指導法の本質とは、本研究では次に述べる「響き合う」指導法と考える。

### 1.3 「響き合う指導法」とは？

幼児は、多様性を有し豊かな個性を持っていることを前提に、幼児とふれあっていく。その場合に、保育でなくて、幼児がやっていることに意味を見出していく保育を進めていかなければならない。幼児をよく見て教師は心を動かす、感じる心ということである。幼児



図 1-1 スパイラル

を見る時といったときに表面的な行動だけを追っていたのではだめで、行動の背後にある幼児のイメージだとか、内面の心の動きを読みとって、それに対応していく。そのときに、幼児が教師やものに反応していく。その反応をまた教師

が心を動かし、幼児の主体性を大事にしながらか対応していく。さすれば、太鼓を打つとき、幼児と教師が太鼓の両面となり響き合って更により音を出すように良い活動が増幅されていく。このことはスパイラル的(図1-1)に幼児は広がった活動をするようになる。これを「響き合う指導法」ということにする。

### 1.4 本科目の学力構造

本研究での授業対象になっている学生への学力は図1-2のように学生の意欲・学ぶ姿勢などの「情意・態度」面を特に重視したい。広岡亮蔵が取り上げている図1-3の「広岡モデル」<sup>3)</sup>は、その面が図のように学力の中心・核になっている。広岡はそれまでの知識・理解への偏重を正し、情意面の重要性を説いている。本研究においてもその情意面を核としているが、幼稚園教師として長く勤めてその間に幼児教育の本質へ迫りつつ幼児に生きる力・学ぶ力を高めていくような教師として高まってほしいと願っている。

よって、学ぶ意欲や関心を高めるなどの情意から入り、幼稚園教育への構えをつくるほうが、後



図 1-2 学力構造

#### 学力の仕組み



図 1-3 広岡モデル

の技能、知識・理解面を高めやすいと考えた。ここでは、保育の意欲を高め、そのことによって「幼稚園教師としての構え」が高まり、幼児の心をとらえそれをつなげていく力・技（「技能」）を伸ばして行ってほしいと考える。その後核の「知識」が高まり、「理解」が高まっていくような流れを大いに期待したいしながら、このように授業で展開していきたい。

## 2. 研究の課題と方法

本研究の目的は、九州女子短期大学幼児健康学科における幼稚園教諭育成を目的とする科目「教育方法・技術論」（講義：2単位）において、受講する学生に、幼稚園教育の目的とする幼児と響きあう指導法への理論及び技能・情意・態度面の高揚を図る。

【課題1】 幼稚園教育と小学校教育の指導法の本質を対比的にまとめ、幼稚園教育の指導法・技術との違いを明確にする。

【課題2】 本科目が小学校教員免許取得を中心としていた内容から離別する。

【課題3】 本研究の仮説を検証する分析手法・手立ての工夫をする。

上記の課題に対して、以下の方法をとる。

【方法1】 文部科学省発行の「幼稚園教育要領解説」及び厚生労働省発行の「保育所指導指針解説書」を軸にして、小学校の教育方法・技術を照らし合わせながら検討を進める。

【方法2】 幼稚園教育方法・技術を中心としたシラバスの構成を行う。特にその中に学生の参加型授業、実地見学、ゲストティチャーによる講話を仕組んでいく。

【方法3】 図2-1の調査カードや感想文等のアナログデータよりも、事前・事後等のデジタルデータを中心にして本研究の成果を明確にする。

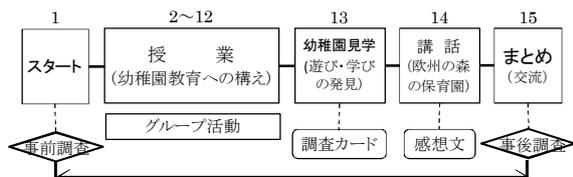


図 2-1 本研究の評価データ取得手続き

## 3. 研究の仮説

小学校の教育方法の考え方を対比的に取扱い、幼稚園教育方法・技術の基本をとらえさせつつ、図2-2のように創造的な遊びをつくり合うグルー

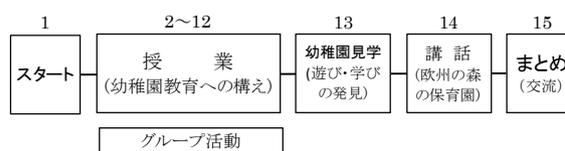


図 2-2 授業の流れ

プ学習（SLG\*）を仕組み、更に幼稚園への実地見学及び外国の幼稚園教育の実際にふれさせていけば、幼児と響き合う指導法を高めていくであろう。

\*SLG (a Support for Learning Group) : 技術の習得するために観察・交流のためのグループ学習<sup>8)</sup>

## 4. 授業設計

全15時間の内容構成（表4-1）において、小学校等の指導、及びブランド保育並びに集団での一斉指導法と決別させ、幼児の個としてそれぞれの思い・願い、そしてイメージをまずとらえ、その思いなどをグループとして膨らませ、集団として活動を広げていくような指導法を理解させていく。そのためには学生たちが、幼児一人ひとりの自発性や主体性を大事にしながら進めていく構えを獲得することが肝要である。その本科目の基盤は、倉橋惣三の「幼稚園真諦」にありとして授業展開を構成していく。それらの学生たちの理解をもとにしながら、教育メディア、教育評価に関する内容を展開するように構成した。それを実際の中でより理解を自分なりに幼稚園教育指導法のシエマの獲得を促進するために、幼稚園見学及びデンマークを中心とした欧州の「森の保育園」の講話をゲスト・ティーチャーに依頼するようにしている。まとめには「各グループの遊びの創意工夫」を発表し、交流を行い、一層の知識・理解を習得させていきたい。こうした授業設計、表4-1のようにまとめた。

## 5. 事前・事後調査の分析

### 5.1 事前・事後アンケートの設定

本研究は事前調査と同一項目による事前・事後調査を行い、その項目等の対比しながらの分析に大きなウェイトをおいている。そこで、表4-1等の授業設計・内容に基づきながら、表5-1の調査項目を作成した。

以下、主な項目それぞれを本研究のねらいにそって簡単に説明する。

なお、表5-1で各項目の番号の後の◎印等は、

表 4-1 科目「教育方法・技術論」授業設計

週	テーマ	授業内容	備考	週	テーマ	授業内容	備考
1	案内	「本講座の目的、全体計画、授業の方法、成績評価等の説明」		9	教育メディア	「保育者のための情報活用能力ー7つの視点」 情報の探索・表現・交流 (explore・express・exchange)の3E理論)の繰り返し、「情報活用能力」を高め、新たな保育観、価値観を見出す契機となる。幼稚園の教師としての「情報活用能力とは何か」を考えるために7つの視点を設けた。この7つの視点から「情報」というものを考えてみよう。	各授業の後半は「グループ活動」(創意工夫の手遊び・折り紙などを行う)。
2	指導の本質1	「ブランド保育と小学校指導型」 「ブランド保育」とは、看板教育である。本来の幼稚園の教育は、「幼児理解」(温かい見方)を基盤にして、子どもが求めているものに対応しながら指導していくことが基本である。		10	環境づくり2	「設定した環境づくり」への7つの話 幼児が設定した環境にただ順応するだけでなく、それを幼児にとって快いもの、価値あるものにしていく力や態度を育てていかなければならない。	
3	指導の本質2	「幼稚園と小学校指導法との違い」 小学校の場合は「教育の生活化」といい、指導するものが先に決まっています、それを子どもが興味をもつように、動機づけていく方法として生活を題材にもってくる。 ところが、幼稚園は「生活(遊び)の教育化」といい、生活そのものが題材である。子どもが丸ごと生活することが、即教育である。	各授業の後半は「グループ活動」(創意工夫の手遊び・折り紙などを行う)。	11	教育評価1	「ピグマリオン効果と評価」 幼児教育の分野でもピグマリオン効果については関心が高く、子どもたちの「やる気」「自信」に繋がるように導くことができると考えられている。「教師期待効果」とも言われ、子どもは期待をされるとその期待に応えようと自然に行動するようになる。その事例を交えて説明する。	
4	指導の本質3	「個と集団の捉え方の違い」 幼稚園の場合だと、子どもの一人ひとりが自分のイメージを描いて活動していて、それがグループになり、そのほうが面白くて層の厚い活動ができるということから、だんだん全体に広がっていくようにする、あくまでも個が基本である。 小学校は、題材が先にあり、一斉の集団でどう指導するか、その中で個を考える。		12	教育評価2	「KR情報・授業評価(保育評価)の実際」 上手な教師は「KR情報を早めに行っている。「先生、これでいい?」「ねえ、先生。見て、見て。」と教師の反応を求める姿は、幼児に多く見られる。これは、自分の評価をしてもらい自分の行動に自信を持つようとしている姿である。この姿はどの子にもある。 この教師の反応を求める(KR)情報は、時期を逸すると効果が半減する。KR情報が欲しいと子どもが思っているときに与えると効果である。	
5	指導の本質4	「子どもが主体的に活動する指導」 子どもの一人ひとりが幼稚園に来たときから、生活の手順よりもまず「幼稚園の楽しさ」を感じさせてやる。すぐ遊びが始められて、幼稚園の楽しさを感じとらせることのほうが大切である。例えば、入園式後、また、日々の朝の始まりを大事にしよう。		13	幼稚園観察	「幼稚園における遊びと環境づくりの発見」 幼稚園を観察する。個々の学生が「自分で気づいた事項・仕掛け」「それから誘発される遊び・活動、学び」の視点に基づき、幼稚園の目的「……適当な環境を与えてその心身の発達を助長すること」の立場から、実際の幼稚園ではどう仕組み、準備されているのかを、自分なりにとらえ、それから誘発される遊びや活動、学びを予想させ、報告させる。	
6	指導の本質5	「子どもの生活を大事にする指導」 倉構惣三がいうように「活動がほつんほつんとあるのではなくて、つなげていくのが先生の役割だ」と。子どもの、それこそ生活化というのが、生活をもっとよくしていく。「生活の教育化」とでも言える。		14	講話と交換	「デンマークの森の自然保育園」 デンマークの「森の保育園」を観察し、自然とのふれあいが、子どもの学びと成長を促すことを実感したG.Tと交流する。小さな頃からのさまざまな経験により、自主性と責任感、社会性などが育まれていくという、教育の原点にふれさせる。	
7	指導の本質6	「多様性が幼稚園の指導の特質」 幼稚園における指導の特質の中に多様性というのも大きな要素である。それは子どもの育ちからも教師のかかわり方は多様であっていい。そうするとそこには多様な方法が併存するということになる。これはほかの教育にないこと。多様な方法が併存する幼稚園は素晴らしい。		15	まとめ	授業総括等(グループ最終発表・交換会) 子どもは多様性を有し豊かな個性を持っていることを前提に、幼児とふれあっていく。その場合に、子どもがやっていることに意味を見出していく保育を進めていかなければならない。子どもをよく見て教師は心を動かす、感じる心ということである。	
8	教育メディア	「保育者のための情報活用能力ー7つの視点」 情報の探索・表現・交流 (explore・express・exchange)の3E理論)の繰り返し、「情報活用能力」を高め、新たな保育観、価値観を見出す契機となる。幼稚園の教師としての「情報活用能力とは何か」を考えるために7つの視点を設けた。この7つの視点から「情報」というものを考えてみよう。					

事前・事後調査での平均値が統計的に有意(p<.05) (以下「有意」)に伸びた項目には◎を、有意ではないが事後が上回ったものには△印を、また低下した項目には▽印を付している。

さて、「1 幼稚園教師希望度」は、他の項目とのクロスを行って、希望度合いに伴ってどう変化するかをみるために設定した。

「2 幼稚園は学校か」は、幼稚園を保育所と同じ位置付けで施設ととらえている学生がいるとすれば、基本的に幼稚園指導の構えができないのではと危惧し設定した。

幼稚園での手遊び・素話・読み聞かせの技能は、幼稚園教師として重要であり、それらの好意度や自信度を問い、かつそれらと他項目とのクロスに

注目したいとして「3及び4手遊びは」「11素話は」「37読み聞かせは」を設けた。

幼稚園等の幼児教育において一般的に重要ととらえているピアノの技能がある。そこで、ピアノに自信がある学生は、やはり幼稚園等の幼児保育の指導法等にも良く通じているのか見するために「5ピアノ得意度」「12ピアノ自信度」を設けた。

「6本科目期待度」は、本科目への期待が高いほど幼稚園に関する知識や態度等がやはり高いといえるのではないかと考え設定した。

長くなるが、「7まず子の気持ちから」「8朝始まり自由に」「9保育案にとられるな」「10幼稚園に時間割は必要(はない)」「17幼稚園指導は、支援でもない、誘導だ」「18教科書必要なし」「19

表5-1 調査項目と観点等一覧

各項目事前事後比較		観点分類	観点分類番号
項	目		
◎：有意な向上	△：向上	▽：低下	
1△幼稚園教師希望度			I
2△幼稚園は学校か			II
3◎幼児前手遊び得意度			II
4◎手遊び好意度			II
5◎ピアノ得意度			III
6◎本科目期待度			I
7△園指導まず子の気持ち			II
8△幼稚園朝始まり自由に			II
9◎保育案捉われるな			II
10△幼稚園に時間割必要性			II
11△幼児に素話自信度			III
12◎ピアノ弾く自信度			III
13◎幼児集団統率自信度			III
14△幼児とふれあう好嫌度			II
15◎クロンバックはA T I			IV
16▽園は適性処遇交互作用			IV
17◎幼稚園は子の誘導から			II
18△幼稚園は教科書必要無			II
19▽個々の保育時間割案必要			II
20△園は子の自然な生活形態に沿う			II
21▽園は指導の法則化不適			II
22△園は子の生活中心・経験的に			II
23◎園の指導法はインフォーマルに			II
24◎園児は皆との生活に喜びを			II
25◎園は園児の望む活動をつなぐ			II
26◎園は個々の活動をつなぐこと			II
27▽保育到達目標は多様で良い			II
28△幼児と遊ぶことは好きか			I
29◎園教師は相手の心を読む力大事			II
30▽ピグマリオン効果は教師期待効果			IV
31◎系統性とは子が連続で活動生み出す			II
32◎倉橋惣三は幼稚園真諦			IV
33◎情報のアーカイヴとは情報圧縮意			IV
34◎律動遊戯とは子の発想をもとに			IV
35△ポートフォリオ評価法とは			IV
36◎幼稚園教育要領の保育目的は			IV
37◎読み聞かせ経験は			III
38△園教師は幼児の関心引出し保育が大事			II

幼児個々の指導案は必要である」「20幼児の自然な生活形態に沿うように」「21指導の法則化は不適」「22幼児の生活・経験を中心に構成」「23指導法はフォーマルではない」「24個の生活の喜びが皆のものになるように誘導」「25及び26は、個々の思いの活動・遊びを教師は繋いでいく」「27全体の目標が第一ではなく、個々の保育目標達成するように」「29幼児の心を読む力が必要」「30ピグマリオンの神話のように、幼児を信じよう」「34幼児自らが発想する律動遊戯を大切に」「37幼稚園の保育目的は、教育だ。預かり保育ではない」「38幼児の関心引出し指導が大切」などは、学生

が幼稚園指導法の原点に位置することと理解し、自分のものになっているかを調べたい。

「13統率自信度」「14幼児は好き」「28幼児との遊びは好き」によって、幼児保育教師としての最も大事な適応性をみたい。

「15及び16のA T Iは、幼児一人ひとりの適性・思い・願いに適合するように指導することであり、幼稚園指導の根幹にかかわる重要な教師としての構えである。

「31と32は、幼稚園指導の根幹に当たる倉橋惣三の理念の理解と把握であり、幼児を思い・願いをつないでいく」知識・意志・態度を持ち合わせているかを問うている。

「33多様な情報をアーカイブ(圧縮)していく考え方・態度」の情報処理能力を幼稚園時代からも育成しようとする能力を問うた。

「35幼児を相対的に評価するのではなく、個々の幼児の遊び・活動の累積・記録を大事」にして評価し、更にふくらませるようにする教育評価の姿勢を調べようとした。

このように調査項目38項目でもって、学生が本科目指導内容の理解度を把握できるように設定した。しかし、これらは学生の幼児教育に対する認識・理解とのズレがかなりあるものと想定している。そのズレがなぜ起きるのか。この後、本科目の授業設計・授業展開を照らしながら検証していきたい。

## 5.2 実践・調査の実施

### 5.2.1 事前調査と幼稚園教師の構え

分析に当たって、図1-2の本科目の学力構造に基づいて表5-2のように4つの観点を設けた。

まず、各項目二件法による事前調査結果(n=67)からI～IVの観点別に分析した(表5-1及び表5-3参照)。

観点I「情意・態度」面での平均値は79%とやや良好といえるが、「1幼稚園教師の希望度」は、70%程度と低い。できるだけ高めたい。

観点II「幼稚園教師としての構え」の中の、「2幼稚園は学校か」は、他の科目の履修していることもあつてか66%と、ある程度認識していた。

しかし、「9保育案に捉われるな」「17幼稚園は子の誘導である」「18幼稚園は教科書必要なし」など「17」～「21」の5項目、「23」「31」などは、50%をかなり下回り、幼児を束縛しないような伸び伸びとした幼稚園教師として指導観を持ちえず、小学校等の学校教育の指導観から脱してい

ないと考えられる学生が多くみられ、本科目の指導の重要性を感じた。

観点Ⅲ「技能」面は「ピアノ」「素話」「統率自信度」は、30%台と予期以上に低く、幼児を導く能力に難しさを予感させるものがあった。

観点Ⅳ「知識・理解」は、「4幼稚園の保育目的」76%とやや良かったが、その他はほとんど知識がない状態であった。

これらのレディネスを踏まえ、再度授業設計を見直し、授業展開に学生の意欲・関心を高める工夫することの必要性が一層増した。そのためには、グループ活動における学生自身による感受性を生かした遊びや遊戯等の取組を仕組むことが求められると判断した。更に実際の教育場面の演習やシラバスの後半にはゲストティーチャーによる体験講話等を設定するようにした。

こうして、写真5-1などの創意工夫のグループ活動をできるだけ毎時取り入れるようにしていった。その時間は、2～12回までの講義後に毎回20～30分程度実践していった。



写真 5-1 グループ学習 (SLG)

ところで、本科目の授業は講義の形態であったが、学生の意欲・関心を高めるためにこうした学生による参加型授業になるように努めていった。

## 6. 事後調査と総合的分析

### 6.1 観点別

まず、事前・事後調査のデータを、観点別に比較した(表5-2)。それぞれの観点は、すべて有意に事後が上回っていた。観点Ⅰ「情意・態度」は、事前から高めではあったが、本科目のポイントである観点Ⅱ「幼稚園指導

表 5-2 観点別における事前・事後比較 (\*\*:P<.001)

観 点	幼稚園課程			養護課程	
	事前 平均値	事後 平均値	事前・事後 平均差T検定	事前 平均値	幼稚園事前 平均差T検定
情意・態度	1.80	1.89	**	1.42	**
幼稚園への構え	1.52	1.63	**	1.43	**
技 能	1.36	1.51	**	1.34	**
知識・理解	1.30	1.40	**	1.20	**

表 5-3 事前事後及び幼稚園・養護比較一覧表 (n=67)

観点分類番号	各項目事前事後比較 ◎:有意な伸び △:伸び ▽:低下	観点分類番号	事前・事後調査の正解率 (%)		平均差判定	平均値(養護)	平均値(幼稚園)	事前事後比較との差
			前	後				
I 情意・態度		I	70	78	↑	0.12	+	
II 幼稚園へ構え		I	75	91	↑	**	0.75	+
III 技 能		I	94	99	↑		0.20	+
IV 知識・理解		II	66	73	↑		0.55	+
		II	24	49	↑	**	0.34	+
		II	70	84	↑	*	0.31	+
		II	87	88	↑		0.63	+
		II	63	73	↑		0.43	+
		II	18	48	↑	**	0.37	+
		II	54	60	↑		0.42	+
		II	99	100	↑		0.29	+
		II	7	30	↑	**	0.14	+
		II	36	37	↑		0.23	+
		II	25	22	↓		0.85	+
		II	30	40	↑		0.08	+
		II	19	15	↓		0.22	+
		II	64	73	↑		0.35	+
		II	21	39	↑	**	0.35	+
		II	55	67	↑	*	0.15	+
		II	58	79	↑	**	0.35	+
		II	67	82	↑	*	0.28	+
		II	93	90	↓		0.58	+
		II	72	82	↑	*	0.32	+
		II	48	73	↑	**	0.52	+
		II	70	76	↑		0.52	+
		III	33	48	↑	**	0.74	+
		III	25	34	↑		0.83	+
		III	18	36	↑	**	0.83	+
		III	15	36	↑	**	0.68	+
		III	90	100	↑	**	0.26	+
		IV	3	22	↑	**	0.43	+
		IV	39	31	↓		0.17	+
		IV	34	27	↓		0.12	+
		IV	18	36	↑	*	0.37	+
		IV	6	22	↑	**	0.25	+
		IV	37	58	↑	**	0.71	+
		IV	28	34	↑		0.68	+
		IV	76	87	↑	*	0.78	+

への構え」、観点Ⅳ「知識・理解」の伸びは、有意であれ、伸びが極めてよくなかった。

ところで、事前調査は、比較分析のコントラス

トを一層明確にするために、子ども健康学科の養護教諭養成課程の学生にも事前調査のみを実施していた。たしかにすべての観点で本科目対象の幼稚園教諭養成課程のほうが有意にすべて上回っていた。とくに幼稚園指導の構えなどを含んだ観点Ⅰ「情意・態度」面は、大きな差があった。それだけに本科目を受講する学生の確かな高い構えがうかがえた。

しかし、幼稚園教諭養成課程の学生の伸びが少なかった観点Ⅱ・Ⅲ・Ⅳについても更なる分析を進めるために各項目の事前・事後の平均値を中心とした比較分析を行った。

## 6.2 各項目

表5-3の中で、事後調査のほうが、事前調査で全項目38個に対して33個(87%)と多く上回り、その中で有意であったのが20個、しかし下降したのが5個あったが、有意な項目はなかった(表6-1)。以上から全体的には、事後に向上していたといえよう。

表 6-1 事後の事前との比較(T検定 P<.05)

	項目数		有意な項目数	
向上	33	86.8%	20	60.6%
下降	5	13.2%	0	0.0%

しかし、4つの観点それぞれが有意ではあってもさほどの伸びを示していないと判断した(表5-2)。そこで、個々の項目からの分析も必要になってきた。

観点Ⅰにおいて、項目「6期待度」「28幼児は好きか」は、予期以上に伸びていた。とくに「教師期待度」は、やや幼稚園教師への望みが事前に薄い学生が、8ポイントほど伸びていたことは授業への成果を認めても良いと考える。

しかし観点Ⅱの「幼稚園教師としての構え」は多くの項目の伸びが有意であれ薄く、教授方法に反省が求められる。

例えば、「2学校か」は、事前1.66から1.73へと僅かな伸びであり、これは、幼稚園は教育する場・学校という根本的な認識に乏しい学生が27%ほどいることにもなる。

そのようにみていくと「9保育案に捉われるな」「17園は子の誘導から」「10教科書の必要性無し」「19個々の指導案は必要」「20園は幼児の自然な生活・思いから」「21指導の法則化は園には不適」「23園指導はインフォーマルである」などが、特

に正解率が50%を下回っていることは、これらから多くの学生が、幼稚園指導の基本的な構えがつかれないままであることを表している。本科目担当者としての責任は実に重い。

まさに幼稚園教育の指導法は、ある考えや知識を一斉に与えるということではなく、幼児一人ひとりの思い・願い・生活から出発することが基本である。そこには指導の法則はなく、まさにインフォーマルな指導の展開となる。個々の幼児のつづやき・悩み・つまずきなどを指導者はとらえ、それに応じる誘導の方法・順序などを心の引出しの中に持ち、指導を進めなくてはならない。その基盤が多くの子にできていないのだ。

さらに観点Ⅲ「技能」は、「5及び12のピアノ」「11素話」「13統率力」など多くが有意に伸びてはいるものの30~40%台である。実にこれも幼稚園教師として心もとない。ピアノなどそれらは本科目の直接の指導内容ではないが、観点Ⅰ「情意・態度」を更に高めるためにも本科目展開中の期間に伸びてほしい技能であった。

観点Ⅳ「知識・理解」は、A T I、ピグマリオン効果、倉橋惣三の理念の理解、幼児の発想を尊重する「律動遊戯」など多くが20~30%台と極めて低い。たしかに事前よりは有意に伸びてはいるが、これからの時代の変化に対応し、求められる幼稚園教師のための基盤が脆い。今後の幼児保育の教師として危惧する。

## 6.3 項目間のかかわり度合い

これまでは主として各項目ごとに分析を進めたり、前もって観点を設けたりして分析を進めてきたが、総合的に相互にかかわりあう項目から潜在因子を見出すなどして分析を進めたい。

### 6.3.1 因子分析

そこで事後調査の標本数67の因子分析を行った。因子数は図6-1によって4因子と判断し、主因子法、Promax回転、因子負荷量が0.4以上で、表6-2の因子分析表を得た。しかし、表6-2のようにクロンバックα係数及び累積寄与率は、かなり低かったが、先の6.1及び6.2でみた観点別及び各項目の事前・事後比較からも本科目の課題・問題点が見えつつあったので4因子とも採りあげることにした。

因子Ⅰは、「5と12のピアノ」と「1園教師希望度」「27

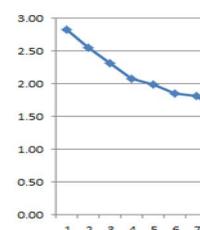


図 6-1 スクリーンプロット

表 6-2 事後調査因子分析結果（主因子法、Promax 回転）

	因子負荷量			
	因子 I	因子 II	因子 III	因子 IV
<b>I ピアノと幼稚園希望の矛盾 (<math>\alpha = .199</math>)</b>				
5◎ピアノ得意度	0.534	0.281	0.011	0.210
12◎ピアノ弾く自信度	0.493	0.252	-0.095	0.385
27▽保育到達目標は多様	-0.409	0.108	-0.142	0.041
1△幼稚園教師希望度	-0.444	0.343	-0.085	-0.058
<b>II 本科目期待と園本質との矛盾 (<math>\alpha = .307</math>)</b>				
6◎本科目期待度	-0.433	0.607	0.230	0.080
2△幼稚園は学校か	0.089	-0.434	0.049	0.249
38△園教師は幼児の関心引	-0.142	-0.467	0.161	-0.047
8△幼稚園朝始まり自由に	0.036	-0.480	0.146	0.112
<b>III 幼稚園教育方法の本質 (<math>\alpha = .467</math>)</b>				
29◎園教師は相手の心をき	-0.024	0.064	0.542	-0.009
24△園児は皆との生活にま	-0.102	-0.047	0.478	-0.069
20△園は子の自然な生活并	0.352	0.238	0.412	-0.296
<b>IV 幼稚園の真諦 (<math>\alpha = .350</math>)</b>				
32◎倉橋惣三は幼稚園真諦	-0.104	-0.096	0.242	0.551
30▽ピグマリオン効果はき	-0.364	-0.092	0.113	0.444
15◎クロンバックはA T I	-0.281	-0.031	0.169	0.427
35△ポートフォリオ評価を	-0.150	-0.128	-0.218	0.418
31◎系統性とは子が連続で	0.049	-0.024	0.164	-0.420
累積寄与率	6.64%	12.09%	16.93%	21.05%

個々の幼児の保育到達目標は多様」は、逆相関のような関係にあることから、「ピアノと幼稚園希望の矛盾」と命名した。たしかに図6-2のように項目5と1は、ピアノが得意である学生ほど、幼稚園

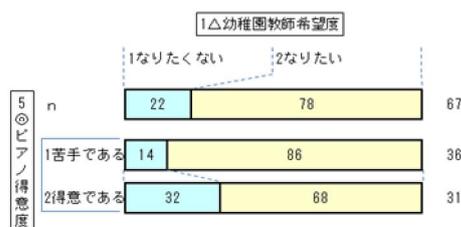


図 6-2 項目 5 と 1 のクロスグラフ

園希望度は薄いといえる関係にある。

因子 II は、やや深刻であるが、本科目に期待していた学生ほど、項目 2、8、38 といった幼稚園教師への基本的な構えに乏しいと析出している。よって「本科目期待と園本質との矛盾」と命名した。

因子 III は、項目 20、24、29 は、幼児の心に入り込み無理なく自然に誘導して遊び・活動を、そして学びをつかっていくという幼稚園指導の本質のとらえ方の基本となるべき項目が集まっている。これは、本科目の指導のねらいに大きく近づいている証ともとらえたい。よって「幼稚園教育方法の本質」とした。

因子 IV は、幼稚園教育方法の理論面の基本となる文献の幼稚園真諦、さらにピグマリオン効果、A T I、ポートフォリオ評価は学生がまとまって理解をしているととらえたい。しかし学生にとつ

て難しい幼稚園教育の「系統性」の理解は、これまた他の項目と逆の関係にあった。しかし、本因子は、幼稚園教育法の真髄をさしていることから「幼稚園の真諦」とした。

### 6.3.2 数量化 III 類

これら 4 因子相互の関係を明確にするために、因子分析で生じた 16 個の項目でもって数量化 III 類を行った。図 6-3 のように I 軸は、ピアノの自信・得意度と理論面に関する項目が対立している。これは、ピアノに自信のある学生は理論面の理解が乏しい傾向にあることを示していて、先にみたようにピアノに自信などを持っている学生は往々にして理論面の理解を疎かにしているとみている。

II 軸 (図 6-3) において、ピアノ及び理論面に強い学生は、幼児教育法の理解などに薄い傾向があることを示している。

よって I 軸を「理論と実践の対立軸」、II 軸を「教師期待効果とピアノ自信の矛盾軸」と命名した。

そこで、I 軸 (縦軸) と II 軸 (横軸) を交差させてみた。すると先の因子分析結果から因子分析の因子 I、II、III、IV と図 6-4 の数量化 III 類の分析図の中の囲みが対応するようである。

第 1 象限には、ピアノに関する項目 5 と 12 だけが、孤立するかのようにある。

第 2 象限には、A T I などの理論に関する項目 15、30、32、35 などのグループがある。そして、実践に関するグループが第 3・4 象限に位置している。

こうしたことから、実践・教育方法に関する II と III は、I・IV のピアノ・理論から離れている。

これは、表 5-3 において実践面に関する項目 7・24・25・26・27・29・38 の事後の正解率が 70% を上回ることから教育方法の実際場面については理解がある程度進んでいるようだが、その実践を下支えともいうべき理論面及びピアノの技能の乏しさ (表 5-3 では正解率が 20~40% 程度) がみえる。これは先にも述べたように、これから幼稚園教師として、ますます成長すべき学生には厳しい状態が見て取れる。

しかし、表 6-3 において、ピアノの技能は事前に比べて事後調査では、かなりの伸びを示しているが、本科目で力を付けるべき理論面、特に項目「16

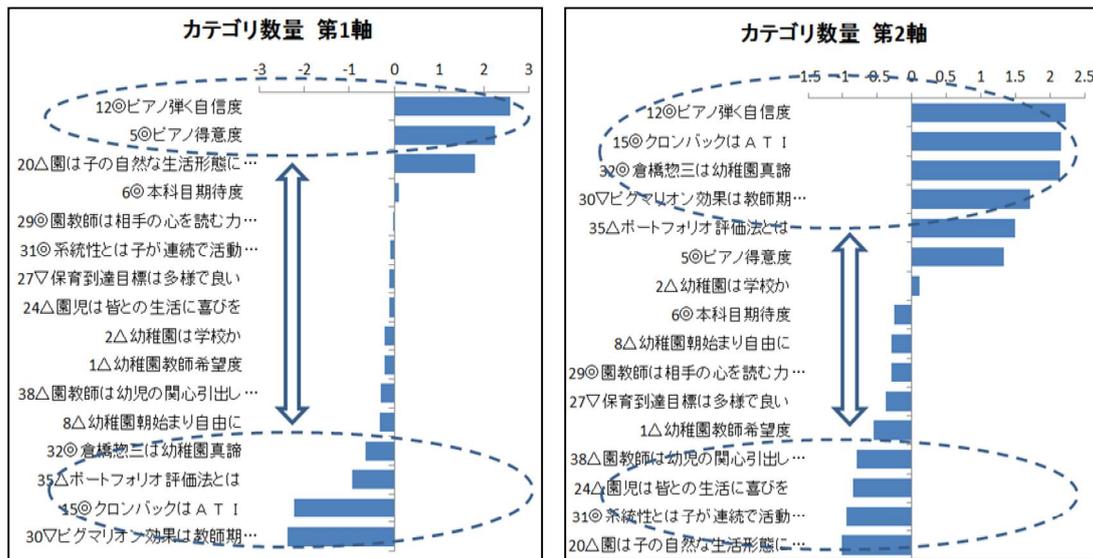


図 6-3 数量化Ⅲ類による I・II 軸

A T I」、及び幼児への愛の注ぎの大切さを求める「30ピグマリオン効果」は、事後に下降した現実を直視し、指導の見直しを徹して図らなければならない。

ところで、先の図 1-2 の「本科目の学力構造図」において、観点 I「情意・態度」から観点 II、III、IVと深まっていく関係を示していた。図 6-4 の因子 II を見てみると、観点 I「情意・態度」の項目「1 幼稚園教師希望度」「6 本科目期待度」と観点 II「幼稚園への構え」に関する項目「8 幼稚園の始まりは自由に」「27 保育到達目標は多様でよい」「29 園教師は相手の心を読む力大事」が同じグループ II であり、これら項目は、互いに類似した関係にある。つまり観点 I から観点 II へと関係を見ることができた。しかし、観点 III、IV への学力構造の方向性は見る事ができなかった。

## 7. 研究の総合的考察

### 7.1 学生による授業評価

本研究の終末時に、学生による授業評価を行った(図7-1)。「授業の進め方の速さ」は、ほぼ学生が満足していたが、他の項目は、70%前後であり、本科目の運び方に満足しているとはいえない。特に「教師の説明

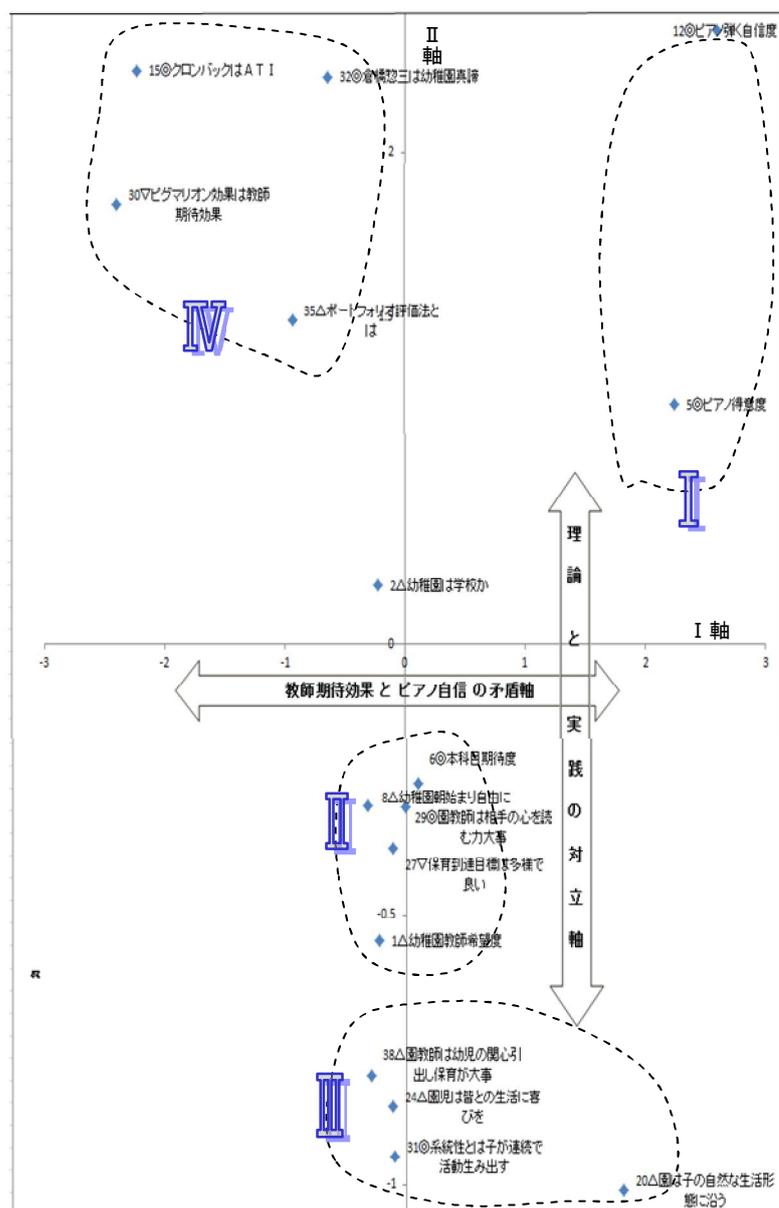


図 6-4 事後調査における数量化Ⅲ類の I・II 軸交差図

の仕方」「その説明の聞き安さ」は、65%とかなり低い。これは偏に授業者の反省を求められるところである。

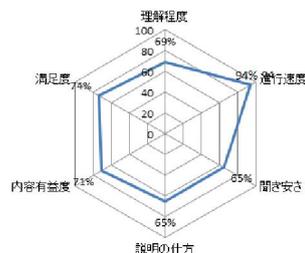


図 7-1 学生による授業評価

このような結果になったことは、

幼稚園教諭養成に向けての内容構成の資料不足のために苦心したこと。これは著者の研究実践の拙さを露呈した。今後、更なる資料収集、特に著者自身による幼稚園での実践データを積み上げるなど実際の教育場面に更に収集整理して、学生がより理解しやすい内容になるよう努力したい。

## 7.2 本科目実践の成果と課題

- 1) 「響き合う指導法」として、実践面の幼児の個から出発してグループ・集団へと広げていく指導の構えへの理解・認識度合いは、事後調査にある程度の伸びがあった。
- 2) 学生一人ひとりの知識・理解の伸びのためには「情意・態度」面の高まりからという「本科の学力構造」のとらえ方は、それに関する項目の学生たちの本科目の期待度の事後の高まりや幼児との遊びへの意欲の高まりに見ることができた。このことは、数量化Ⅲ類において、観点ⅠとⅡが同グループにあることからもいえた。
- 3) A T I 理論、教師期待効果、ポートフォリオ評価などの実践面の基本となる理論面の理解が良くなかった。
- 4) 理論面と実践面との乖離が見られた。例えば、A T I 理論や教師期待効果などと他の実践面との関係はほとんどなかった。
- 5) 幼児保育に必要といわれるピアノ技能との理論面及び実践面との乖離がみられた。
- 6) 授業設計において授業13回目に「幼稚園見学」、及び授業14回目に「デンマークの森の保育園」の体験講話を仕組んだことは、学生に実践面の認識を高めたと感想文などからうかがえた。なお、感想文等の分析研究は、次の機会を待ちたい。
- 7) 授業2～12回目まで各回の授業の後半に保育遊び等の創意工夫を交換するグループ活動(S L G)を仕組んだことは、手遊びなどの技能を高めることになったといえよう。
- 8) 幼児の心を読む、幼児の思いをつないでいく

といった幼稚園保育への構えは、理論面と乖離している状態であった。しかも、その理論面の理解はかなり低く、学生の今後の幼稚園教師としての成長に不安が感じられた。よって授業展開などの見直しが必要である。

## 8. 研究のまとめ

本科目指導において、指導力の拙さは否めないが、学生に理論面と実践面との大きな乖離をしてしまったことは、大きな課題である。保育・教育に携わることは、日々の実践が研究に値することであり、理論研究がすべての基本にあると考えるとき、学生一人ひとりの今後の教育者・保育者としての成長を憂慮する。この責任は、ひとえに本研究の著者にある。

## 参考文献

- 1)高杉自子・平井信義・森上史朗,幼稚園教育要領の解説と実践 [3],小学館,pp.6-46,1989.
- 2)高杉自子・平井信義・森上史朗,幼稚園教育要領の解説と実践 [2],小学館,pp.66-78,1989.
- 3)学習論—認知の形成,広岡亮蔵,p46,明治図書,1973.
- 4)倉橋惣三,幼稚園真諦,フレーベル館,2008.
- 5)児玉衣子,改訂倉橋惣三の保育論,現代図書,2008.
- 6)文部科学省,幼稚園教育要領解説,フレーベル館,2008.
- 7)厚生労働省,保育所保育指針解説書,フレーベル館,2008.
- 8)Louis,C.,Research Methods in Education, ROUTLEDGE, p238,1989.

(原稿受付 2013 年 1 月 15 日)